

第57歩

谷川俊太郎展など

現代日本を代表する詩人の谷川俊太郎さんが昨年（令和6年）11月に亡くなりました。92歳でした。多くの日本人がそうであるように、私も大好きな詩人であり、その言葉の魔法に心踊らされっぱなしでした。特に、初めての詩集のタイトル「二十億光年の孤独」、という言葉はなんとも言えずカッコ良くて、よく口に出して使わせていただきました。作詞をされた「鉄腕アトム」のテレビアニメの主題歌も小さい頃よく口ずさんでいました。

その谷川俊太郎さんがさまざまな絵描きや写真家と作った絵本の展覧会が、昨年の7月20日から亡くなる2カ月ほど前の9月16日まで、高松市美術館で開催されていました。「谷川俊太郎 絵本★百貨展」と題されたもので、その作品を見てみると、最後まで絵と言葉による表現に果敢に挑んでおられた様子がよく分かりました。本市の美術館のホームページには、「バラエティ豊かな絵本に共通するのは、読み手に対する谷川俊太郎の希望の眼差しです」、と記してありました。そしてその眼差しの多くは、子どもたちに向けられていたように思います。今さら言っても詮無いことですが、感性豊かな谷川俊太郎さんの「言葉と表現」を一人でも多くの子どもたちにもっと味わわせてあげたかったと思います。

ご冥福を心からお祈り申し上げます。

ところで、高松市美術館の今年度の特別展の入場者が好調です。4月から始まった特別展「日本の巨大ロボット群像」は42日目に来場者数が一万人を達成。「谷川俊太郎 絵本★百貨展」は、開展32日目で一万人を達成しました。さらに、10月12日から行われた「五代浮世絵師展」は31日目で一万人を達成。しかも、外国人の来場が4・3%（令和6年11月30日現在）と多く、浮世絵の世界的人気がうかがい知れました。

「アニメ・ロボット」と「谷川俊太郎」と「浮世絵」。ある意味、日本を代表するテーマです。今年4月に始まる瀬戸内国際芸術祭を前にして、日本ならではの個性的な特別展の開催により、本市の芸術指数が少しずつ盛り上がってきているように感じられ、大変嬉しく思います。

